

窓

Keiso
Vol.34
2026.4.1

Creativity is continual surprise.

—Ray Bradbury

創造性とは絶え間ない驚きである。 レイ・ブラッドベリ

東大阪大学・東大阪大学短期大学部附属図書館

研究室訪問

こども学科 教授 平田敦司

プロフィール

芸術大学で彫刻を専攻。卒業後、同大彫刻研究室に勤務し職業彫刻家アトリエの助手を務めた。その後フリーの彫刻家として活動しながら、服飾専門学校講師、大学教員等を経て、美術造形系科目の担当教員として本学短期大学部実践保育学科に着任。2024年大学こども学科に異動。専門の彫刻制作を中心に研究を進めています。



Q：記憶の中、最初に自分で買った本は何でしょうか。

A：はっきりと覚えてはいませんが、「学研まんがひみつシリーズ」の中の1冊ではなかったかと思います。小学生の頃は、図書室で借りた本を学校内の学童保育教室（鍵っ子教室）でよく読んでいました。また最初の本ではありませんが、強く意識して購入した本は、橋本治著『桃尻娘』の文庫版でした。高1の時、クラスメイトに借りて読んだ作品ですが、どうしても自分の手元においておきたかったので。以降、橋本治は私にとっての「神」となりました。

Q：最近買った本は？

A：文庫ですが、原田マハの『風神雷神』（上下巻）、9人の作家による『サイボーグ009 トリュビュート』。大阪・岡山間の移動が頻繁なため、持ち運びが楽な文庫を購入することが多いです。少し前ですが、ハードカバーでは町田康の『口訳古事記』でしょうか。かなりえげつない関西弁による古事記の口語訳で、最高でした。

Q：好きなジャンルは？

A：一番多く購入するジャンルは小説系です。現代小説、時代小説、SF等『お話もの』が好きなんだと思います。

Q：本を買う時、ネット書店と本屋と、どちらをより多くご利用でしょうか。

A：文庫の購入が多いので、本屋に割と足を運ぶ方だと思います。書店内をぶらぶらしながら面白そうな本との偶然の出会いを楽しんでいます。ただ入手に時間がかかりそうな専門書等はネット購入になります。

Q：いま、お手元に読んでいる本は？

A：関口裕昭著『翼ある夜 ツェランとキーファー』です。ナチスの強制収容所生活を経験したユダヤ人詩人のパウル・ツェランと、彼の詩をモチーフにした作品等を制作するドイツの現代美術作家アンゼルム・キーファーに焦点を当てた研究書です。

Q：時々読み直す本はあるでしょうか。

A：橋本治の『S & G グレーテストヒッツ+1』です。サイモンとガーファンクルの曲をタイトルとした短編小説集で、重い内容の短編ばかりなのですが、時折読みたくなり本棚から引っ張り出します。その時々で1,2話読んで閉じるといった読み方です。

Q：もし蔵書の中一冊だけ選ぶなら、どの本を選びますか。その理由は？

A：エルヴィン・ミッチ著『エゴン・シーレ画集』（坂崎二郎監修・訳）です。大学4年生の時、奈良でシーレ作品と出会い、絵を観て泣くという経験を初めてしたその展覧会場で購入を決めた画集です。シーレ作品からはいまだに影響を受けています。

Q：読書の醍醐味は？

A：読後のカタルシスでしょうか。ただ全然スッキリしない読後感の作品も、それはそれで「もやもや」を噛みしめます。

Q：座右の銘をお教えてください。

A：「これでいいのだ。」 赤塚不二夫の『天才バカボン』に登場するバカボンのパパの決め台詞ですが、そう言い切れるパパのような自分でいたいという願望からこの言葉を選びました。大好きなキャラクターであり大好きな台詞です。

Q：読書について、学生へのアドバイスをお願いします。

A：電子書籍等を否定するつもりはありませんが、物理的な書物から得られる内容は、手に取った重さも含めて作者の思いや揺らぎを読み取ることができるものであると確信しています。小説でもマンガでも雑誌でも構わないので、自身の手でページをめくり新たな情報を得る感覚を味わってほしいと思います。肌感覚の読書を心地よく感じてほしいと考えます。



長浜開町四五〇年記念事業 「秀吉公」坐像

再会、そして

図書館長 渡邊ルリ

小学生のとき、国語で新美南吉の『ごんぎつね』の授業があった。ぎつねの‘ごん’が、村の若者の‘兵十’にあげたいと思って‘いわし’を盗み、兵十の家に投げ込んだので、怒ったいわし屋が、犯人と思いきんで兵十をなぐったことがわかる場面がある。そこで担任の先生が、「いわしは、とても安い魚だったんだ」と言った。単純な私はパツと思った。「安いいわしなら、そんなに怒らなくてもいいんじゃないかな」だが、すぐに先生はこう言った。「安いいわしを売って生活していたいわし屋さんは、とっても貧しかったんだ」そのとき、「え？」と、頭がぐるっとまわった感じは、今もリアルによみがえってくる。

ごんは、‘いたずら’の結果、兵十に取り返しのでつかないことをしたと考える‘つぐない’をしたいと思う。そのなかで、ごんは兵十も自分と同じ‘ひとりぼっち’だと感じて、兵十に心を寄せていく。ごんは人間の世界の約束ごとを知らない。誰も教えてくれないけれど、ひとりで人間の生活を観察し、記憶し、感じ、考えて行動する。‘ひとりぼっち’の深さからのごんの‘気づき’。ごんと出会う子どもが出てこない設定。火縄銃をかまえるまでの兵十の慣れた動作。今、読むと、これらがずしりと重く感じられる。

若い学生さんたちは、何か経験することで、感じ方が微妙に、あるいは深く変わり、世界が違って見えることがあるだろう。そんなときは、読書に対しても、興味をもつジャンルが変わることや、好きな人物が変わることがあるかもしれない。

学生時代に日本近世文学の先生が、「真の出会いとは‘再会’である」と話されたことがあった。その意味を尋ねると、「一度別れてから再会したときに、初めて出会った意味がわかる」ということだった。一度別れるということは、遠くで暮らすというだけでなく、心の距離感も大きいだろう。また、毎日そばにいてよく知っているつもりの人や、知り合って十年以上も経つ人の、自分には新しい一面に触れることがあると、これも再会かな、と思うようになった。そして、永遠に会えなくなってしまった人の言葉や存在の意味（の可能性）に、はっと気づくこともある。もちろん‘何がその人の真実なのか’なんて、わからないままで、自分に都合よく考えているかもしれないけれど、これも‘再会’と呼べないだろうか？少し、‘物語との再会’と似ているような気もする。

さまざまな数多くの作品が、‘出会い’と‘再会’によって新たな自分や他者を発見するさまを描いてきた。夏目漱石の『それから』も、J.K.ローリングの『ハリー・ポッターと賢者の石』も、尾田栄一郎の『ONE PIECE』も、主人公がそれまで見ていた世界が一変するような‘気づき’の瞬間を描いている。だが、もし「特に、主人公の‘気づき’そのものを全編通して描いた作品は？」と聞かれたとしたら、真っ先に思い浮かぶのは、アガサ・クリスティーの『春にして君を離れ』（訳：中村妙子）である。

『春にして君を離れ』の原題は“Absent in the Spring”、シェイクスピアの『ソネット』98（“SONNET” XCVIII）の冒頭部を採ったもので、美しい春に愛する人と離れているさびしさをうたう。本作は、クリスティーがメアリ・ウェストマコット名で発表した、ミステリーではない六篇のうちの一つで、ポワロもミス・マープルも登場せず、事件も起こらないのだが、なかなか怖い作品だった。

弁護士の夫と恋愛結婚し、一男二女を育て上げたジョーンは、結婚した末娘が住むバグダードを訪れた帰途、砂漠の中の鉄道宿泊所で数日足止めされる。独りになったジョーンは、初めて自分の人生に向き合う。最愛の人は何を望んでいたのか。優越感から軽く憐れんでいた人は、本当はどのような生き方をしていたのか。自分は何をしてきたのか。記憶の断片が現れ、つながり、世界が姿を変えていく。‘再会’のその先に、この作品の怖さがある。同時にそれは、‘誰もが陥るかもしれない弱さ’を包容する、作者の強靱な人間認識の現れなのかもしれない。

ところで、今回「訳者あとがき」を読み直しておどろいたのは、クリスティーが本作のテーマを「何年もの間心の中で追い続けてきた」後、一週間で書き上げ、「一語も訂正せず、そのまま出版した」と語っていたという記述だった。そこに多少の誇張があったとしても、この‘複雑な心理と記憶が時空を超えて交錯する織物’をミスなく書き上げるなど、失敗の多い私には、とうてい人間わざとは思えなかったのである。



学生選書ツアーに行ってきました！

選書ツアー：10月22日(水)

WEB 選書：10月23日(木)～31日(金)

書店：ジュンク堂大阪本店

参加学生：合計9名



【参加者のコメント】

- ✳️ 思っていたより自由度が高くてびっくりしました。
- ✳️ 文庫版は持っていますが、大型版を持っていないかったので、文庫版との描写の違いが見たくて選びました。
- ✳️ 選んだのはミステリーだけど、謎解きを楽しめて人間の温かさを感じられる本です。

- ✳️ 楽しかった。絵がかわいくて、読みやすい本です。
- ✳️ スポーツ選手が書いた本を読みたかったのと、文だけでなく、図があってわかりやすかったので選びました。
- ✳️ 中学校の元担任の先生のオススメです。学校の先生の立場で考えさせられたとおっしゃったので、今後教育の現場に立つ上でタメになる内容だと思いました。

選ばれた図書(88冊)は、図書館2階閲覧室「学生選書コーナー」に並びます。貸出もできますので、ぜひご利用ください。

2026 年度図書館企画展示

2 階閲覧室では、テーマに沿った図書を随時展示しています。

2025 年度は以下のテーマで展示しました。

前期：世界の食
後期：健康(心と身体)

新生活 START! キャンパスライフを充実させよう!



教員推薦図書

国際教養こども学科准教授 吉田 唯

『魔法少女はなぜ変身するのか
ポップカルチャーのなかの宗教』

石井 研士 春秋社、2022,6,17

娘は「プリキュア」に夢中です。一方、私は「風の谷のナウシカ」が好きでした。なぜ、いつの時代も戦う少女や魔法少女は人々を惹きつけるのでしょうか。

本書は、宗教とポップカルチャー研究の第一人者である石井研士氏が、「魔法」や「変身」をキーワードに〈戦う少女〉像について読み解くと同時に、ポップカルチャーに登場する神道的要素、異界・他界観、聖地巡礼といった宗教文化との関係にも目を向けている一冊です。

さらに、「プリキュア」制作現場では、子どもに恐怖や暴力を与えないために「お腹パンチはしない」「敵と呼ばない」など、徹底したガイドラインが設けられていることも紹介され、作品世界の倫理的な厚みを示しています。

戦う少女や魔法少女は、単なる美少女キャラクターではなく、現代に受け継がれる“新しい神話的存在”であることを教えてくれる一冊です。



実践保育学科講師 福鹿 慶子

『青い鳥』 重松 清 新潮文庫、2010,6,29

将来、教育や保育に携わる皆さんに、ぜひ読んでほしい一冊です。

主人公の村内先生は吃音をもち流暢に話すことができませんが、言葉がうまく出ないからこそ、誰よりも「言葉の重み」を知っています。

今の現場では、特別な支援を必要とする子や目に見えない悩みを抱えている子が増えています。私たちはつい方法や技術に目が向きがちですが、大切なのはそこではありません。村内先生は、子どもを変えようとするのではなく、まずその子が安心して存在できる関係を築こうとします。その姿は、個々のペースに寄り添う姿勢の土台を教えてください。

「みんな違っていい」を現場で実践するのは容易ではありません。つい「正解」で解決したくなりますが、本当に必要なのは、正しい答えではなく自分の気持ちを丸ごと受け止めてくれる存在です。

この本の題名にある「青い鳥」とは、遠くにある幸せではありません。教師が逃げずに寄り添い続ける「覚悟」こそが、子どもたちの希望の光（青い鳥）になるのだと私は信じています。完璧な先生でなくていい。悩む子のそばで一緒に悩み、その子を丸ごと受け止める、そんな「あなたしかできない教育・保育」の形をこの本で見つけてみてください。



実践食物学科助教 畑 智子

『一汁一菜でよいという提案』 土井 善晴 新潮文庫、2021,10,28

タイトルを読むと本書はいつも料理する人に向けて書かれたと思うかもしれませんが。しかし食は命に直結する行為で、私たちは毎日食事します。一生に一度も料理しない人は現代ではほばいないでしょう。そういう意味で全ての人に向けて書かれた本だと思います。

筆者が本書で述べているのは「料理道」です。日本には柔道、剣道、書道、茶道、華道など「道」と呼ばれる分野があり、必然の中で練り上げられた型で、その精神を込めるための器です。普段の料理は自分や家族に作る必然の中で生まれ、そこに愛情という精神を込めることができます。料理が出来合いのものであっても自分なりの工夫が生まれます。毎日繰り返すうちにやがて作り手の内に道として確立されます。このように誰でも普段の料理を「道」へ高める方法が、とても簡単な一汁一菜という型を通して提案されています。それも写真とレシピ付きで。読後には、ごはんともそ汁を作って食べたくなる、ぜひ、そうやって欲しいと思って推薦します。普段から料理をする人もしない人も、体験入門のつもりで手に取ってみてください。

